

「いい友を選びなさい」ということ

◆いい友達とはどういうことか

親や先生は「いい友達を選びなさい」と言います。そういう親や先生自身が自分の親や先生に同じことを言われてきました。親や先生自身も親や教師の自分は大成人としての友人を選んでいそつりなのでしょう。「いい友達を選びなさい」確かにそのとおりなのですが、考えてみますと人間には100パーセント悪い人はいないし、また100パーセントいい人もいないのですね。善悪の区別はそんな簡単なものではないのですね。

第一に友人というのは偶然のチャンスからできるものです。第二に友情というものは、相手を良い悪いというような隔てをしない許しあったものの中から生じてくるものでしょう。ですから「いい友達を選びなさい」というのは、ちょっと矛盾を含んでいるとも考えられます。

とすると私達が「よき人を友に選べ」というのはどういうこととでしよう。私はこの言葉を「善と悪」というふうに分けて受けとってはならないと思います。一人の人間の中に善いところと、善くない所とがある。善きところ、学ぶべきところと、価値のない、まねしてならないところをはっきり見極めつきあいなさい、私はこう受け取りたいと思います。

◆誰にも短所と長所がある

どんな人にも、たとえ「悪友」と言われる人にも善いところがあります。立派な人といわれる人にも、悪い部分、陰の部分はあるのです。どんな人間とつきあっても、肝心なのは自分がそういうところを見抜いて、相手の尊敬できるところから学んでいく姿勢だと思えます。

相手の人の部分を見て全体がそうだと思うのは錯覚というものです。「数学ができるからイイ人」、「スポーツマンだからイイ人」という思いかたは、錯覚であることが多いのです。逆に「成績が奮わないからダメな人」、「掃除をさぼるから人間のすべてがダメ」という見かたも誤解であると思えます。

こう言っても私は、「成績がわるくていい」、「掃除をさぼるっていい」と言うものではありません。どんな人にも長所がある。同時に短所もある、長所だけに気をとられてウツトリしているのと、あるときその人の短所が見えたととき何か自分が相手にウラギラタように思って、えらく傷つく。そんなことがありがちなのです。「いい人」だと信じて結婚したが、数年一緒に暮ら

したら相手の欠点が見えてきて、どうしても鼻持ちならない、嫌いで嫌いでしょうがない、顔をみるのもイヤになったなどという話を聞くことがあります。そしてそういう人はたいい「相手にウラギラタ」と言うのです。

相手がウラギッタのではなくて、実は自分にその人を見る目がないのです。くどいようですが100%善い人はいませぬ、100%の悪者もいないのです。みんなどこかに欠点を抱えた人間です。そしてみんな現在の状態より少しでも善くなろうとしている人間です。こちらから見ていて少しも努力していないし、頑張ってもいない人でも、それはこちらの見かたであって、当人の気持ちの中では、善くなり、よく生きたいというものがあるのです。それが人間です。

◆学ぶものと捨てるものを見極める

こういうことは、これは何も人間との付き合いのことだけでなく、もっと広げてどんなものにも「学ぶものと捨てるもの」などがあるということをお話しているようです。どんなものでもこちらの「見かた」「感じかた」次第ということ。自分の「受け取りかた」という自分の「目」を確かなものにしていくこと、これが人生勉強ともいうものです。

たとえば歴史や文化、山や森という自然は黙って何も語りません。これは物理的な事実です。しかしその歴史や文化、自然を自分がどう見るかによって、私たちはそういうものからいろいろなことを学べるのです。それを歴史や文化、自然が私たちに語りかけ、教えてくれるとも言えます。

どんな人間でも自分次第で自分の周囲のものから、いろいろなものを学ぶことができます。自分の周囲にいる人々、家族の人達、近所の人々、学校の友達、先生、人間は実に多くの

人々から学ぶことができます。いや周囲の人間だけではなく書物や各種の映像からも学べます。身近に起きる諸々のこと、社会の出来事や自然現象からも学ぶことができます。まさに「人生、学ぶこと多し」です。いや「人生、学ぶこと尽きず」とも言えるべきでしょう。ですから「学ばざれば卑し」ということばも生きていくのです。

初めに戻って言います。どんなものにも学ぶべきものと、捨てるべきものとが共存しています。友を選ぶとはその人の善さを取り入れ、悪さをただしていくという姿勢ではないでしょう。選ぶ力、一つのものの中から善いものを選び取る能力を養っていくこと、それが長年語り継がれてきた「よき友達を選びなさい」という言葉ではないでしょうか。

とすればそれは大人も含めて常に自分自身に向けての自戒の言葉であるはず。言葉であるはず。